秋田県立大学総合科学研究彙報　第9号（2008）：39－48

カート・ヴォネガットと戦争体験

高階　悟

Ⅰ．永遠の眠り（Sleep for eternity）[1]

カート・ヴォネガット（Kurt Vonnegut）は、1922年11月11日にドイツ系移民4世としてインディアナ州インディアナポリスに生まれ、2007年4月11日にニューヨークで84歳で永遠の眠りについた。ヴォネガットは眠りについて「死とは眠ること。眠りによって、心の苦しみも、肉体につきまとう幾多の痛みにも決着がつく。これこそ願ってもない達成だ」[2] とハムレットのセリフを晩年の作品で引用している。人間のさまざまな根源的な問題を追及し続けたアメリカ人作家ヴォネガットは、世界の終末を扱った初期の小説『猫のゆりかご』（*Cat's Cradle*, 1963）の中で人生について「生きること」は副業で「死んでいること」が本業であると皮肉っぽく述べている。[3]ヴォネガットはSF作家、風刺作家、そしてポストモダン作家として14冊の小説、3冊の短編集、5冊のエッセイ集、そして戯曲などを発表し、それらのほとんどの作品が日本に紹介されている。彼は自称ニコチン中毒のヘビースモーカーであり、70歳代になってからは「わたしは長く生きすぎた」と述べ、80歳代には "I am committing suicide by cigarette." [4]と述べ、冗談まじりに「タバコのパッケージには、喫煙は命を奪う可能性があると書いてあるのに、私はまだ生きており、タバコ会社を訴えるつもりである」とも述べていた。ヴォネガットは84歳になり、マンハッタンの自宅の階段から転倒して怪我をし、その数週間後の4月11日に天命をまっとうした。彼は波乱に満ちた人生を振り返り「そういうものさ」（So it goes.）と言っているようである。ヴォネガットの墓碑銘（エピタフ）には皮肉を込めて「すべてが美しく、つらいことはなにもなかった（Everything was beautiful. Nothing hurt.）」[5]と書かれるかもしれない。

Ⅱ.「そういうものさ」（So it goes.）

カート・ヴォネガットは「そういうものさ」を最初のベストセラー小説『スローターハウス5』（*Slaughterhouse-Five*, 1969）の中で50回以上も呪文のように用いている。このような多義的な言葉や独特の表現の繰り返しはヴォネガットの得意とする手法である。たとえば、「ハイ・ホー」（Hi ho.）が小説『スラップスティック』（*Slapstick or Lonesome No More!*, 1976）で数十回使われており、「チリンガ・リーング」（Ting-a-ling.）が小説『ジェイルバード』（*Jailbird*, 1979）と最後の小説『タイムクエイク』（*Timequake*, 1997）の最後の一行で使われている。また、小説の登場人物の墓碑銘、歴史上の人物の墓碑銘、ヴォネガット自身の墓碑銘が作品中に繰り返し描かれている。それらの言葉の意味をヴォネガットに尋ねたら、たぶん「わたしの言っていることはすべてたわごと（horseshit）さ」[6]と彼は微笑むであろう。しかし、真実のヴォネガット像は、創作活動における多くの彼の「たわごと」や社会活動における矛盾した言動の下に潜んでいる。戦争体験者であり、ドイツ系アメリカ人作家のヴォネガットの素顔を探ってみたい。

第6作目の小説『スローターハウス5』によっ

て、ヴォネガットはSF作家からリアリズムを超越したポストモダン文学の作家として一躍有名になった。ヴォネガットは第二次世界大戦中にドイツで捕虜として体験した1945年2月13日の古都ドレスデン爆撃を時間と空間を超えた手法（メタフィクション）[7]で描いている。戦争中の原体験から23年後、彼は自伝的小説に副題として「子供十字軍、死との義務的ダンス」(The Children's Crusade, A Duty-dance with Death）を付けて、戦争や国家の権力に左右される兵士や一般市民の生死の運命をシニカルに描いている。『スローターハウス5』は、ヴォネガットの回想の世界、作者と同じ1922年生まれの貧弱な体格の検眼医ビリー・ピルグリム（Billy Pilgrim）の世界、そして時空を超越したトラルファマドール星人（Tralfamadorians）の世界で成り立っている。この小説は作者が伝統的な全知の語り手として現実と虚構を支配する代わりに、さまざまな視点からドレスデン無差別爆撃を語ることによって現実と虚構を織り交ぜたファンタジーの世界を作り上げている。

小説『スローターハウス5』で頻繁に使われている「そういうものさ」は、4次元の世界に生きるトラルファマドール星人が誰かの死に直面した時、肩をすくめて死人についてつぶやく言葉である。この小説では次のように "So it goes."が使われている。

> He was down in the meat locker on the night that Dresden was destroyed. There were sounds like giant footsteps above. Those were sticks of high-explosive bombs. The giants walked and walked. The meat locker was a very safe shelter. ..... The Americans and four of their guards and a few dressed carcasses were down there, and nobody else. The rest of the guards had, before the raid began, gone to the comforts of their own homes in Dresden. They were all being killed with their families. So it goes.[8]

これはイギリス空軍、続いてアメリカ空軍を中心にした連合国軍のドレスデンへの高性能爆弾と焼夷弾の投下を被害者の視点で描いた場面である。アメリカ兵のビリーはヨーロッパ戦線でドイツ兵に捕らえられ、捕虜として動物の死骸が転がっている地下の食肉貯蔵庫（屠殺場第5号）の中で連合国軍の爆撃を体験する。ビリーは幸いにも食肉貯蔵庫が安全な防空壕の役割を果たし、助かる、が一夜明けたドレスデンの街は破壊され、焼き尽くされ、死体が散乱していた。この空爆による軍人の死者はほとんどなく、約135,000人のドレスデン市民と東欧からの難民が殺された。[9]「そういうものさ」。

ドレスデンの爆撃から生き残ったビリーは、一時的に精神病に陥るが、その後アメリカに復員し、検眼医として成功する。さらに、金持ちの女性と結婚し、2人の息子と娘に恵まれ、キャデラックを乗り回す安逸な生活を送る。ビリーは娘の結婚式の1967年にトラルファマドール星人に誘拐され、時間の歪み（time warp）を通じてトラルファマドール星で数年を過ごし、彼らの時間に対する考え方を身につけ、タイムトラベルができるようになる。トラルファマドール星人にとっての時間は"All moments, past, present and future, always have existed, always will exist."[10]として一望に見渡せるものであり、人間の時間認識とは全く異なっていた。ビリーは1985年2月13日に64歳で自分が殺される運命も知った。ビリーはシカゴ野球場で空飛ぶ円盤についての講演中に、自分の死を聴衆に予言する。警官が彼を取り囲み、聴衆は動揺するが、ビリーは落ち着いて "Farewell, hello"と呼びかけ、次のように述べる。

> 'It is time for you to go home to your wives and children, and it is time for me to be dead for a while -- and then live again.' At the moment, Billy's high forehead is in the cross hairs of a high-powered laser gun. It is aimed at him from the darkened press box. In the next moments, Billy Pilgrim is dead. So it goes.[11]

ビリーは聴衆に帰宅するように促し、野球場の暗い記者席から発せられた高性能レーザー銃に打たれて亡くなる。「そういうものさ」。ビリー・ピルグリムは自分を狙っている人物はドレスデンの捕虜収容所から生き残ってきたアメリカ兵ラザロ（Lazzaro）であることを知っていたが、何の抵抗も言い訳もせずに他人の死を見守るように自分の死を受け入れ、巡礼者（ピルグリム）または放浪者（ピルグリム）としての一生を終える。[12]ビリーの墓碑銘は「すべてが美しく、つらいことはなにもなかった」（Everything was beautiful, and nothing hurt.）である。ビリーが自分の死に対して「そういうものさ」と呟くことは「人生とはそんなもんだ」（That's life.）と言って運命を甘受することである。人間の死が「本業」であり、「死との義務的ダンス」の結果として避けることのできない宿命であるならば、ある種の諦観を抱き「そういうものさ」と言い捨てることもできる。しかしながら、連合軍によるドレスデン爆撃によるドイツ人集団虐殺は「そういうものさ」で片づけることができない事実である。それはアメリカ軍の広島への原爆投下で約270,000人が死亡した事実、ナチスドイツのユダヤ人大量虐殺（ホロコースト）によって約6,000,000人が犠牲になった事実を「そういうものさ」で片づけることができないことと同じである。人間の個人の死は多少の生存期間の相違があるにしろ、前世から定められた宿命（destiny）として受け入れざるをえないが、紛争や戦争中の集団虐殺は不条理な運命（fate）であり、人間がさまざまな破壊兵器を使って実行する殺人行為である。その被害者や関係者はその理不尽な運命に対して「何故殺されなければならなかったのか」の問いを発し続けることができる。また、集団虐殺の生存者は死者からの呪縛という重荷を背負い続ける。

評論家トニー・ターナーは、小説『スローターハウス５』では「完全な決定論のファンタジーが完全な消極性と行動を起こすことの無意味さの容認を正当化している」[13]と述べている。小説『スローターハウス５』はヴォネガットの世界、復員軍人ビリーの世界、そしてトラルファマドール星人の世界から成り立っており、後者の二つの世界だけに目を向けていると「完全な決定論」の世界に見える描写が多い。また、小説中に作者ヴォネガットの明確な反戦のメッセージが書き込まれていないことも事実である。

しかし、トラルファマドール星人の時間から解放された視点は、人間社会の過去の愚かな行為を直視し、歴史的事実を第三者的に語る一つの手法として用いられており、「完全な決定論」を裏付けるものではない。ビリーの生活には物事を運命として受け入れる達観した振る舞いに満ちているが、中年の検眼医になってから「決して大声ではなく、時々一人で静かに泣くことがあった」[14]とある。ビリーは戦争中は何を見ても泣くことがなかったが、時間から解放された後、自分の無力感と絶望感で一人泣いたのではないか。その涙は作者ヴォネガットの涙でもあろう。ヴォネガットはこの小説でドレスデン爆撃の事実がアメリカの『陸軍航空部隊公式戦史・第二次世界大戦編』全27巻のどこにも記載されていなかった事実を明らかにしており、現在の行動によって過去や未来を変えられることを示唆している。彼はドレスデン爆撃を題材とした『スローターハウス５』を書くにあたり、人間の智恵や権力でも変えることのできない宿命と外部からの力やコントロールによって生じた結果としての運命の相違を見分けている。人間の運命を変える可能性を表す言葉として自由意志がこの小説で語られており、後の小説にも引き継がれてゆく。戦争小説『スローターハウス５』のメッセージは検眼医ビリーの事務所に掲げられた以下の文章に要約されている。

> GOD GRANT ME THE SERENITY TO ACCEPT THE THINGS I CANNOT CHANGE, COURAGE TO CHANGE THE THINGS I CAN, AND WISDOM ALWAYS TO TELL THE DIFFERENCE.[15]
>
> 「神よ願わくばわたしに変えることのできない物事を受け入れる落ち着きと、変えることのできる物事を変える勇気と、その違いを常に見分ける智恵をさずけたまえ」

このようにヴォネガットの小説には人生に対する教訓が多く散りばめられており、若い読者

を引きつけたのである。一方、自伝的な要素や教訓的な要素が強い小説に対して批評家の芸術的な評価が別れる場合もあるが、それは心優しいヒューマニスト・ヴォネガットの特徴でもある。小説『スローターハウス５』は、1972年にジョージ・ロイ・ヒル監督によって映画化され、第二次世界大戦中のビリー（マイケル・サックス）の戦争体験とその後の生活が悲喜劇的に描かれている。

Ⅲ．戦争準備中毒者（Compulsive war-preparers）

ヴォネガットの『スローターハウス５』が1970年代にアメリカ社会で注目され、ベストセラーになった一つの理由として、第二次世界大戦においてチェスの駒のように翻弄された無力な兵士像は、悲惨なベトナム戦争に動員された兵士像に重なったためと言われている。1965年アメリカは反共産主義の南ベトナム政権を支援するために北ベトナムに対する空爆を開始し、この戦争による北ベトナムの死傷者約2,270,000人をだし、1973年アメリカ軍は南ベトナムから撤退した。ヴォネガットはベトナム戦争中にエッセイや講演等で反戦のメッセージを発し続けた。「アメリカの空爆による北ベトナム人の皆殺しは第三次世界大戦の引き金になるおそれがある」(1971)、「アメリカ人は今日でも奴隷制と大量殺戮（ジェノサイド）の実験をしている」(1972)、「この戦争はアメリカ人が広島でわれわれ自身にやり始めたことの延長線上にあり、その継続にほかならない」(1973)[06]など。

戦争体験者ヴォネガットの創作活動のメインテーマは、人間の運命をもてあそぶ紛争や戦争をこの世から消滅させることである。ヴォネガットのデビュー作の短編「バーンハウス効果に関する報告書」("Report on the Barnhouse Effect," 1950）は、心理学教授バーンハウス教授が世界の武器を全て破壊しようとする物語である。バーンハウス教授はたびたび「なぜ広島に原爆を落したのであろうか」、「新しい科学情報は人類のためになっているか」[07]の二つの問いを研究室の弟子に発し、放射能を発しない長崎型原爆の約55倍の破壊力のある「精神動力」(dynamopsychic）を発見する。その発見を知った国防省は、世界の軍事拡張競争にその遠く離れた場所から物体を破壊する力を利用しようと教授に協力を求めた。しかし、教授は人々の道路を造り、用水路を作るなど平和目的のためにその「精神動力」を有効的に使いたいという意志を表明し、行方をくらます。その後、教授は世界中の軍事施設を一つ一つ破壊し始め、世界中が教授の居場所を捜し始め、軍国主義者たちは教授の死を待ち望む。主人公の弟子は教授の「精神動力」を密かに引き継ぎ、教授が亡くなっても、平和のためにバーンハウス効果を存続させる決意で行方をくらます。バーンハウス効果を支配するものは世界を支配することになる。

ヴォネガットは活字になった最初の短編で世界の民族紛争・戦争中に起こっている集団殺戮を食い止めるための一つの理想的な解決法を提示している。それはこの世から武器、爆弾、ロケット、戦闘機、軍艦、大量破壊兵器などを無くすことである。もし軍隊が石ころか棒ぐらいの装備しか持てなくなったならば、大量の死傷者がでるような紛争や戦争はなくなるであろう。「バーンハウス効果に関する報告書」はヴォネガットが描いた数少ないユートピア小説の一つである。

ヴォネガットはベトナム戦争時代には反戦のために講演をし、その後アフリカのビアフラやモザンビークなどを訪問し、悲惨な大量虐殺、難民として流浪する人々やアフリカの資源（奴隷、石油、ダイヤなど）に群がる先進国の代理戦争のような内戦の実状を伝えている。ビアフラ人はビアフラ戦争（1967-70）で約2,000,000人が飢餓と戦乱により死亡したが、ナイジェリア政府による大量虐殺（ジェノサイド）の証明が困難と語られている。なぜならば、「もし一部のビアフラ人が生き残ったら、大量虐殺はなかったことになる。もしビアフラ人が一人も生き残れなかったなら、だれが虐殺の非を訴えるのか」。[08]ヴォネガットはビアフラから帰り、第二次世界大戦の終わり以来はじめて泣いたと晩年のエッセイ集『死よりも悪い運命』(*Fates Worse Than Death*, 1991）で述べている。モザンビークでは、飢えのために麻痺した子供達、鳥かごのように肋骨が出ている大人達、故意に不具にされた大人達に会い、「そこは人間の作りだした地獄」[09]と描

写している。モザンビークの内戦では約1,000,000人の死者がでたと言われている。その後、ヴォネガットはアメリカ軍が最新兵器を利用してイラクを空爆した1991年の湾岸戦争、そして今日も続くテロとの戦いのイラク戦争の時代を生き延びた。1950年のデビュー小説のバーンハウス教授の二つの疑問「広島への原爆投下による集団虐殺の正当性」と「科学技術の人類の平和への貢献」はヴォネガット自身の問いでもあるが、２１世紀に入り、次第に彼の理想とした平和な軍備撤廃の社会から遠のいていく現実を凝視し、次のように述べている。繰り返される人間の残虐行為や民族浄化は、世界の戦争準備中毒者（compulsive war-preparers）がある種の人間を憎めと扇動し、小国の政府を打倒しようとしているためである。さらに、人類の未来について悲観的（ペシミスティック）な見解を述べている。

> It may be that we were put here on Earth to blow the place to smithereens. We may be Nature's way of creating new galaxies. We may be programmed to improve and improve our weapons, and to believe that death is better than dishonor.[20]

ヴォネガットは不条理な戦争や紛争を語り、反戦活動を続けたが、晩年には「人間は地球をこっぱみじんにするために生まれてきたのであり、戦争用の武器を改良に改良を重ねるようにプログラムされており、恥辱に耐えて生き延びるよりも死ぬようにプログラムされている」と述べている。人間が最新兵器で人間を大量虐殺（ジェノサイド）することは宿命であり、日本軍の戦陣訓「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」のように恥辱に直面したら死を選ぶことが人間の宿命であると言っている。このような見解は宿命と運命の区別がないトラルファマドール星人の視点に立った世界観である。戦争準備中毒者による虐殺行為を不条理な運命ではなく、前世から定められた宿命とすることは、ブラックユーモアというよりもヴォネガットが晩年に落ち入った深いペシミズムを物語っている。

Ⅳ. 生存者症候群（Survivor's syndrome）とペシミズム

人間は人生の晩年に達するに従い未来に対する希望を失い、老人性ペシミズムに陥るのだろうか。ペシミズムとはオプティムズムのように神を信じ、人間の善を確信することなく、「生きることは苦しむことである」という厭世観を抱くことである。ヴォネガットが社会的に十字架として背負った苦しみは、1945年の「ドレスデン爆撃」体験であり、個人的には1944年に22歳の息子（ヴォネガット）が戦場にいる間に睡眠薬を飲んで56歳で自殺した母親である。戦争と集団虐殺の被害者と加害者の意識の問題は繰り返し小説やエッセイで扱われており、自殺志向の登場人物はたびたび小説やエッセイに登場している。家族内に自殺者がでると、家族の生存者はその死の呪縛を背負い続け、時には呪縛から逃れるために自殺者の跡を追うこともある。自殺志向の人物について「自殺者の息子たちは一日の終わり、血糖が低下する時刻になると、しばしば自殺を考える」[21]と述べている。1984年ヴォネガットは、62歳の時"I wanted out of here. "[22]という気持ちで睡眠薬とアルコールで自殺を試みた。

ヴォネガットは82歳の最後のエッセイ集『国のない男』（*A Man without a Country*, 2005）で、「アルベルト・アインシュタインとマーク・トウェインはその晩年、人類を見限った。トウェインの場合は、第一次世界大戦を見ていないのに。.....偉人のアインシュタインとトウェインにならって、わたしも人類を見限ることにした」[23]と述べている。若きヴォネガットは武器の無い平和な社会を信じて創作活動や講演活動に活躍したが、晩年のヴォネガットは核兵器への道を開いたアインシュタインや南部作家トウェインのように「戦争準備中毒者」や「権力に酔った指導者」との論争に疲れ果てて、悲観している。このような社会への悲観的な態度は最初のエッセイ集『ヴォネガット、大いに語る』（*Wampeters, Foma & Granfalloons*, 1974）にも見られる。

> What actually happened when I was

twenty-one was that we dropped scientific truth on Hiroshima. We killed everybody there. And I had just come home from being a prisoner of war in Dresden, which I'd seen burned to the ground..... So I had a heart-to-heart talk with myself. 'Hey, Corporal Vonnegut,' I said to myself, 'maybe you were wrong to be an optimist. Maybe pessimism is the thing.'[24]

これはヴォネガットが上昇気流に乗って売れっ子作家になった1970年にペニントン大学での卒業記念講演で述べた内容である。最初に「かつてはオプティミストであったが、現在は完全なペシミスト」であると前置きをして、なぜペシミストになったかを説明している。「わたしたちは科学的真理を広島に投下し、多くの人々を殺した。ちょうど、私が焼き尽くされたドレスデンでの捕虜生活から復員した頃。私は自分に言った。オプティミストになるのは間違っているのではないか、ペシミストが当を得ている」。軍事的に意味のないドレスデンへの爆撃、戦争の終結を早めるために最先端の科学兵器・原子爆弾の広島投下が若いヴォネガットに与えた衝撃は大きく、精神的外傷(トラウマ)になったと思われる。20歳代のヴォネガットは、無差別爆撃や原爆投下を「そういうものさ」と言い切ることができなかったのである。ヴォネガットは小説『青ひげ』(*Bluebeard*, 1987)の主人公の画家のように生存者症候群(survivor's syndrome)[25]にかかったのである。生存者症候群は、戦争や災害などに遭いながら奇跡的に生き残った人がしばしば陥る罪悪感のサバイバーズ・ギルト(survivor's guilt)も含む症状である。『青ひげ』の主人公の画家は、オスマン・トルコによる約1,000,000人のアルメニア人虐殺から生き延び、親族と一緒に死ななかったことを恥じ、生存者を信用できず、時にはトルコ人に対して復讐心を抱くこともあった。アルメニア人の画家はユダヤ系アメリカ人の未亡人と浜辺で会い、いきなり「あなたの両親はどんな死にかたをしたの?」と問われ、死骸の中にまじって死んだふりをして生き残った自分の生存者症候群を自覚し、不条理な運命を振り返り始める。アルメニア人の画家が過去を振り返り、不条理な運命を執拗に問い続ける意識・生存者症候群はナチスドイツのユダヤ人虐殺の生存者や広島・長崎の原爆の被爆者や関係者の場合も同じである。

ヴォネガットはドレスデン爆撃の生存者として歴史上のさまざまな大量虐殺を問い、広島への原爆投下と科学的進歩の人類への貢献度を執拗に問い続けた。ヴォネガットの第4作目の小説『猫のゆりかご』では原爆の父と呼ばれた物理学者が広島に原爆が投下された日に何をしていたかを描き、オフ・ブロードウェイで上演されて戯曲『さよならハッピー・バースディ』(*Happy Birthday, Wanda June*, 1971)には長崎に原爆を投下したパイロットを登場させ、第10作目の『デッドアイ・ディック』(*Deadeye Dick*, 1982)ではアメリカ政府が中性子爆弾の安全性の実験のために高速道路で中性子爆弾を爆破させ100,000人の住民を全滅させ、建物や機械は無傷で残したミッドランド・シティを描いている。生き残った主人公は廃墟になったミッドランド・シティで夕日を浴びてそびえ立つ円錐形の建物に絵葉書の富士山を思い浮かべる。[26]大江健三郎は中性子爆弾によって全滅したミッドランド・シティを日本列島全滅のメタファーとして読み取っている。[27]

ヴォネガットは1984年5月の「核状況下における文学ーなぜわれわれは書くのか」をメインテーマにした国際ペン東京大会に特別ゲストとして初来日した。滞在中は大江健三郎や井上ひさしなどと対談し、「優しさ」(decency)に基づく戦争のない世界への希望を述べている。ヴォネガットは滞在中に京都と広島を訪問する予定であったが、多忙のため早めに帰国した。来日後のヴォネガットの小説の中で広島・長崎の原爆の取り扱いに変化が見られる。広島・長崎の原爆を戦争中の集団虐殺の問題や科学時術の人類への貢献という観点ではなく、生存者の問題として扱っている。

第11作目の『ガラパゴスの箱舟』(*Galapagos*, 1985)では広島の被爆者の女性ヒサコが身重で、ガラパゴス諸島に向かう豪華客船の乗客の一人として登場する。20世紀後半

には、人類の頭脳が巨大化し、そのために経済恐慌、戦争、疫病と大変動を招き滅亡へ向かう。偶然にこの豪華客船が「第二のノアの箱舟」になり、乗り合わせた人々が生き残り、日本人の被爆者ヒサコの子供アキコから次第に脳が小さくなり「カツオドリ」(booby) に進化 (退化) して人類が生き延びる。100万年後、小さい脳にひれ足とくちばしのカツオドリに進化して生き残った新人類にとって、ナイフ、機関銃、そして手榴弾は無用の長物となる。従って、原爆を広島に投下したアメリカのパイロットは人類の進化に多大の影響を残した飛行士として描かれている。[28]被爆者という戦争被害者の立場を逆転させて、被爆者を100万年後に小さい脳のカツオドリに進化する新人類の祖先にしている。20世紀の人間の巨大な脳はできそこないであり、お互いに暴行を働き、相手を殺す傾向にあり、人類が生き残るには脳にダメージを受けて退化することが必要であった。これは人間の愚行に奇想天外な仕掛けで対抗するブラックユーモアであり、ここに希望はなく「現代世界に対する重い悲哀(サドニス)を、さらに深めている」[29]ヴォネガット像が浮かぶ。

第13作目の『ホーカス・ポーカス』(*Hocus Pocus*, 1990) では広島の原爆の生存者がアメリカの刑務所の所長として登場する。この時代はアメリカがベトナム戦争で死体を数えている間、日本人はドルを数えて、「ビジネススーツの占領軍」として巨額の借金で国家財政が破綻したアメリカ社会を管理する時代である。アメリカは他国の人々の土地を奪い、その文化を破壊した帝国主義の避けられない後遺症によって発展途上国になる。[30]しかし、アメリカの遺産を牛耳っている日本も軍事力で他国の土地や資源を奪うとする帝国主義とは無縁ではない。被爆者の刑務所所長は父親の世代の南京虐殺事件(南京事件70周年記念日,12.13, 2007) のドキュメンタリーフィルムを観てからアメリカ人の同僚に被爆者であることを告白する。広島への原爆投下は、南京大虐殺と同じように許すことのできない典型的な人間の愚行である。その後、この潔癖な被爆者の所長は帰国し、広島の原爆慰霊碑の前で自殺する。所長の遺書はなく、生存者症候群と断定できないが、所長は生前に「人間よりも鳥に生まれたかった」と言っていた。ヴォネガット68歳の時のこの終末論的小説には、質素な墓碑銘のスケッチが4枚あり、最後の墓碑銘には疑問符「?」が中央にあるだけである。その墓碑銘には亡くなった人の名前、年号も碑文も何もなく、雑草が生え、小さな花が咲いているだけである。誰の墓とも見分けられない疑問符「?」の刻み込まれた墓碑銘は、ヴォネガットを含むすべての人々の墓碑銘とも言える。ヴォネガットが墓碑銘を最初に描いたのは自伝的小説『スローターハウス5』(1969) からであり、ドレスデン爆撃の生存者としての重荷を軽減するために墓碑銘を描き続けたのである。ヴォネガット は生存者症候群に囚われた時、「生きること」は副業で「死んでいること」が本業であると呟き、登場人物の墓碑銘を描き続けたのである。最初の墓碑銘は、小説『スローターハウス5』の一ページ全面に描かれていた主人公ビリーの墓碑銘"Everything was beautiful, and nothing hurt."であり、ヴォネガットは30年後の『キヴォーキアン先生、あなたに神のお恵みを』(*God Bless You, Dr. Kevorkian*, 1999) ではその碑文を自分の墓碑銘の言葉として紹介している。さらに、『ホーカス・ポーカス』には地球の墓碑銘もある。ペシミステックな野生動物救助連盟の会長が「あらゆる科学者は、人間がこの惑星を急速に破壊している」と警告して、空飛ぶ円盤でやって来る宇宙人に見えるようにアメリカのグランド・キャニオンの断崖に次のような碑文を大きく彫ることを提案している。

> WE COULD HAVE SAVED IT, BUT WE WERE TOO DOGGONE CHEAP.[31]
> 「われわれはこの惑星を救う気があれば救えたのに、しかし、われわれはいまいましいほど俗悪であった」

この小説『ホーカス・ポーカス』では広島の原爆投下の生存者が自殺をし、帝国主義的アメリカの終焉と環境破壊による地球の終末を暗示して終わる。晩年のヴォネガットはペシミステックな心境の変化について「不条理な事柄を嘆くよりも笑うことを選んだアメリカのユーモア作

家または風刺作家は、ある年齢を過ぎると耐えられなくなりペシミストになる」[32]とエッセイで述べている。ヴォネガットがペシミステックになったのは、人生の下り坂にあって「悲哀」を深めたためでもあり、戦中派の作家として戦争の不条理さを書き続けたが地球の墓碑銘を書かなければならないほど欧米、中東、アジア、アフリカの「戦争準備中毒者」の論理が経済のグローバリゼーションと共に世界を支配し始めたためでもあろう。

V.「チリンガ・リーング」(Ting-a-ling.)

ヴォネガットの最後の小説『タイムクエイク』(*Timequake*, 1997) は「感想や体験談をまぜて作ったシュー」のような作品であり、今までの話題が自伝的に繰り返されている。晩年を意識したヴォネガットはプロローグで「これが最後の本」と宣言し、第9作目の小説『ジェイルバード』で使った「チリンガ・リーング」(Ting-a-ling) を再び多用している。この言葉はヴォネガットの分身 (alter ego) であるSF作家キルゴア・トラウト (Kilgore Trout)[33]がお気に入りの言葉であり、宇宙人ヴィクーナ星人 (Vicuna) の考え方が織り込まれた言葉でもある。この言葉は『スローターハウス5』で呪文のように繰り返された「そういうものさ」(So it goes.) と同じような役割を果たしている。小説の登場人物が宿命やある不条理な運命に遭遇した時に発する言葉である。キルゴア・トラウトが第二次世界大戦のヨーロッパ戦線に参加した時、この言葉は彼の与えた指示で砲兵隊が一斉射撃をして標的に命中した時に叫ぶ"Ting-a-ling!"であった。[34]肉体から離れて魂が音楽のように飛び回ることのできるヴィクーナ星人にとって、この言葉は"Hello", "Good-bye", "Please", "Thank you"の意味を持つ万能な言葉である。[35]「チリンガ・リーング」は日本語では「チリンチリン」という鈴の鳴る音である。最後の小説『タイムクエイク』では、第5作目『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』(*God Bless You, Mr. Rosewater*, 1965) から登場してきたSF作家キルゴア・トラウトが2001年夏に84歳 (ヴォネガットと同じ年齢) で亡くなる。この小説では時間旅行が可能な時間の歪み (time warp) のように時間の震動 (timequake) を通じて十年前の1991年に遡り、2001年までのトラウトとヴォネガットの体験が描かれている。最後に、老SF作家キルゴア・トラウトは浜辺でのパーティに集まったヴォネガットを含む聴衆に次のように語り掛けて、この小説は終わる。

> This was his finale: "I have thought of a better word than awareness," he said. "Let us call it soul." He paused. "Ting-a-ling?" he (K. Trout) said.[36]

トラウトの最後の言葉は"Ting-a-ling?"である。「はい、これまで?」、「ありがとう?」または「さようなら?」と言っているようである。しかし、最後の疑問符「?」はなにを意味しているのだろうか。老SF作家トラウトがこの世から天国に続く青いトンネル (仏教では三途の川) の入り口に立ち、未練がましくこちらを振り返っているようである。ベトナム戦争の脱走兵となり、スウェーデンの造船所で亡くなったトラウトの息子のレオ (Leo) は、第11作目の『ガラパゴスに箱舟』では幽霊 (ghost) となって青いトンネルを通ってこの世に現れ、100万年の時間を自由自在に動き回る語り手の役割を果たしている。浜辺でのパーティでのトラウト言動の陰に、見え 隠れするのはヴォネガットの姿である。ヴォネガットは無神論者 (free-thinker) であり、次第にペシミステックになってゆくが、晩年になり来世 (the afterlife) や霊的な世界に言及した文章が多く目につく。ヴォネガットは時空を超越した宇宙の世界ではなく、青いトンネルの向こうの来世または天国に目を向けている。『タイムクエイク』の2001年夏の浜辺でのトラウトのパーティには分身また生霊 (doppelganger) として亡くなった親族・戦友 (ヴォネガットの母、先妻のジェイン、バーナード・オヘアなど) が参加している。[37]ヴォネガットは「死とは無 (nothing) である」[38]と述べているが、時間と空間を超えた4次元的なものへの関心を深めている。架空のインタビュー『キヴォーキアン先生、あなたに神のお恵みを』で

は、ヴォネガット自身が来世のレポーターとして青いトンネルを通って来世の21人の歴史上の人物と対談をしている。ヴォネガットの分身であるトラウトは、時間と空間を超えた存在を「魂(soul)」と呼んでいる。魂とは肉体を離れ自由に音楽のように世界に広がり、鈴の音のように「チリンチリン」と鳴り響くものである。ヴォネガットは82歳の最後のエッセイ『国をなくした男』(*A Man without a Country*, 2005)では「神が存在する証明は音楽であった」[39]を彼の墓碑銘とし、さらに芸術と魂について次のように述べている。

> The arts are not a way to make a living. They are a very human way of making life more bearable. Practicing an art, no matter how well or badly, is a way to make your soul grow, for heaven's sake. Sing in the shower. Dance to the radio. Tell your stories.[40]

戦争体験者の作家ヴォネガットは鳥籠から飛び立っていったが、不条理な運命を凝視し続けた彼のメッセージは「チリンガ・リーング」とこの世に永遠に鳴り続けるであろう。彼のさまざまな奇想天外な発想や皮肉を含んだ多くの言説は実用的ではないが、人生の不幸や困難を耐えるのに役立つであろう。

ヴォネガット同様に第二次世界大戦を体験し、ベトナム戦争、そしてイラク戦争に反対し続けた作家ノーマン・メイラー(Norman Mailer)が、2007年11月10日にニューヨークで84歳で亡くなった。ユダヤ人のメイラーは戦争を国家の集団的暴力とし、強制収容所や原子爆弾による大量虐殺は人間の意識に荒廃をもたらし、その国家や権威に対する個人の抵抗を人間の生命エネルギーの燃焼として「ホワイト・ニグロ」("The White Negro", 1957)で展開している。1960年代には、人間の情熱を終結した個人の暴力を社会の変革を目指すパワーの源として楽天的に語っていたが、晩年には悲観的なっていく。メイラーは76歳の時のインタビューで「年をとるに従って、人間の本性についてますます悲観的になってきた。人間というものは、全員、殺人者だと思う」[41]と述べている。神と悪魔の葛藤を描く神秘主義者のメイラーは『死刑執行人の歌』(*The Excutioner's Song*, 1979)では輪廻(reincarnation)を信じる死刑囚を描いて、二度目のピュリッツアー賞を受賞した。ノーマン・メイラーは「新しい種類の人間」(a new breed of man)[42]を探求し続けた作家でもある。

注

(1) Kurt Vonnegut & Lee Stringer, *Like Shaking Hands with God*, (WSP, 1999) p.74
Lee Stringerとの対談集でヴォネガットは"Do you want to sleep for eternity, or do you want to go back Earth?"の問いを発している。無神論者(free-thinker)のヴォネガットは復活を望まず、'sleep for eternity' を望むと発言している。

(2) Kurt Vonnegut, *Hocus Pocus*, (G.P.Putnam's Sons,1990) p.151
Shakespeareの戯曲*Hamlet*の第三幕一場のハムレットの有名なセリフ。

(3) Kurt Vonnegut, *Cat's Cradle*, (Delta, 1963) p.115

(4) Kurt Vonnegut, *Welcome to the Monkey House*, (Delta, 1998) p.xv

(5) Kurt Vonnegut, *God Bless You, Dr. Kevorkian*, (Washington Square Press, 1999) p.11

(6) Kurt Vonnegut, Playboy Interview, *Wampeters, Foma & Granfalloons*, (Panther, 1974) p.214

(7) パトリシア・ウオー 結城英雄訳 『メタフィクション』(泰流社, 7.10, 1986) pp.223-229

(8) Kurt Vonnegut, *Slaughterhouse-Five*, (Panther, 1972) p.118

(9) カート・ヴォネガット 伊藤典夫訳『スローターハウス5』(ハヤカワ文庫, 12.31, 1978) 「訳者あとがき」

(10) Kurt Vonnegut, *Slaughterhouse-Five*, (Panther, 1972) p.25

(11) Ibid., p.97

(12) 高階悟 「戦争に翻弄される無垢な若者たち」『たのしく読めるアメリカ文学』(ミネルヴァ書房, 2.20, 1994) p.222

(13) Tony Tanner, *City of Words: A Study of American Fiction in the Mid-Twentieth Century*, (Jonathan Cape, 1976) p. 200

(14) Kurt Vonnegut, *Slaughterhouse-Five*, (Panther, 1972) p.131

(15) Ibid., p.46

(16) Kurt Vonnegut, *Wampeters, Foma & Granfalloons*, (Panther, 1974) p.163, p.174

(17) Kurt Vonnegut, *Welcome to the Monkey House*, (Dell, 1968) p.167

(18) Kurt Vonnegut, *Wampeters, Foma & Granfalloons*, (Panther, 1974) p.146

(19) Kurt Vonnegut, *Fates Worse Than Death*, (G.P. Putnam's Sons, 1991) p.168

(20) Ibid., p.145

(21) Kurt Vonnegut, *God Bless You, Mr. Rosewater*, (G.P. Putnam's Sons, 1991) p.138

(22) Kurt Vonnegut, *Fates Worse Than Death*, (G.P. Putnam's Sons, 1991) p.181

(23) Kurt Vonnegut, *A Man without a Country*, (Seven Stories Press, 2005) p.88

(24) Kurt Vonnegut, *Wampeters, Foma & Granfalloons*, (Panther, 1974) p.156

(25) Kurt Vonnegut, *Bluebeard*, (Delacorte Press, 1987) p.20

(26) Kurt Vonnegut, *Deadeye Dick*, (Delacorte Press, 1982) p.237

(27) 大江健三郎 「小説のたくらみ、知の楽しみ」『波』(新潮社, 1983年 4月号) p.6

(28) Kurt Vonnegut, *Galapagos*, (Delacorte Press, 1985) p.156

(29) 大江健三郎 『核の大火と「人間」の声』(岩波書店, 5.14, 1982) p.289

(30) Kurt Vonnegut, *Fates Worse Than Death*, (G. P. Putnam's Sons, 1991) p.131

(31) Kurt Vonnegut, *Hocus Pocus*, (G.P.Putnam's Sons, 1990) p.140

また、ヴォネガットはエッセイで地球の墓碑銘として次の言葉を提案している。

"We could have saved it, but we were too darn cheap and lazy." *The New York Times Book Reviews*, 4.22, 1990

(32) Kurt Vonnegut, *The New York Times Book Reviews*, 4.22, 1990

(33) ヴォネガットの小説にたびたび登場するSF作家Kilgore Troutは1973年の小説 *Breakfast of Champions* では1907年生まれ、1981年死亡になっている。彼の墓碑銘は

"We are healthy only to the extent that our ideas are humane."である。1985年の小説 *Galapagos*では息子のLeoと同様に来世にいることになっている。そのKilgore Troutがこの *Timequake*で再登場する。

(34) Kurt Vonnegut, *Timequake*, (G. P. Putnam's Sons, 1997) p.50

(35) Kurt Vonnegut, *Jailbird*, (St Edmundsbury Press, 1979) p.55

(36) Kurt Vonnegut, *Timequake*, (G.P. Putnam's Sons, 1997) p.214

(37) Ibid., p.205

(38) Kurt Vonnegut, *Fates Worse Than Death*, (G. P. Putnam's Sons, 1991) p.140

(39) Kurt Vonnegut, *A Man without a Country*, (Seven Stories Press, 2005) p.66

(40) Ibid., p.24

(41) ノーマン・メイラー「戦争の世紀、20世紀のアメリカを語る」『プレイボーイ』(集英社, 1999年 10月号) p.54

(42) Norman Mailer, *An American Dream*, (Andre Deutsch, 1979) p.270